献　　辞

国際文化学会会長　山　川　偉　也

教育・研究を中心とする卓抜な諸活動によって，36年の長きにわたり，桃山学院大学発展のため多大な貢献をされてきた赤瀬雅子教授が，2004年３月末日を俟って退任されることとなった。「定め」とはいえ，感慨一入なものがある。深い感謝と慰労の思いをこめて、『国際文化論集』第29号を「赤瀬雅子教授退任記念号」として刊行し，その功績を顕彰させていただきたい。

赤瀬雅子教授は，1933年11月に東京都新宿区早稲田南町４番地で出生され，初等・中等教育を奈良と東京で受けた後，早稲田大学第一文学部文学科に進学された。学部卒業後，1960年に渡欧してパリ大学文学部に留学され，２年間，比較文学専攻課程において勉学に勤しまれた。そして帰国後は早稲田大学大学院文学研究科に進学され，1967年にその博士課程を満期退学された。

教授が経済学部専任講師として桃山学院大学に奉職されたのは，博士課程を修了されたその翌年の1968年のことであった。その後の経歴も順風満帆で，1970年に同学部助教授，1974年には同学部教授に昇任された。その間，多くの学生を育てられたが，そのなかには，専任教員として桃山学院大学に奉職した方々もおられる。そして1989年に文学部が開設されると，それに伴って文学部へと移られ，魚が水を得たように，フランス語・フランス文学，日本文学・日本文化等を中心とする文学部での教育・研究にますます専念されることとなったが，1993年に大学院文学研究科修士課程が，また1999年に同博士課程が設立されると，それぞれただちに「日本文化」「比較文化」講義・演習担当教授に就任され，「国際文化」を大枠とする大学院文学研究科での

教育・研究の深化・充実・拡大にいよいよもって尽力されるようになり，今日に至っている。

その間，学内行政等に関わって，多岐にわたる委員会業務や学会活動に従事された。全学的には図書館委員会，教務委員会，教職課程委員会，研究所委員会，社会教育委員会，部落問題委員会，社会教育センター委員会等，学部内では人事委員会等の委員として，また学会関係では国際文化学会会長（1994年）を務められた。

教授はまた，学外にあっても種々の学会活動に参加されたが，その主力はやはり比較文学関係のそれに置かれていて，日本比較文学会東京支部幹事（1967年），日本比較文学会関西支部幹事（1968年），日本仏学史学会理事（1990年），日本比較文学会理事（1991年），日本比較文学会評議員（1996年）等に就任され活躍されたが，研究者としての教授の声名に対する社会的評価を物語るものとして，これらは特筆に価することであると言えよう。

第４回「物集索引賞」受賞対象となった（1990年11月）永井荷風研究をはじめとする赤瀬教授の学問的業績は，日本文学と比較文学の両分野に関わって，数多い著書，論文，辞典・事典，書評，文献目録，年表，翻訳，学会報告等を通じて展開されているが，いずれの分野にあってもきわめて幅広く，論考対象となる作家や主題も複雑多岐にわたっている。またその歴史的射程も広大で『伊勢物語』からサルトルの哲学的諸著作にまで及んでいる。それらを要約的にでも解説・紹介することは，このような場所においては不可能なことである。巻末に収録された著作目録を御参照いただきたい。

最後に，この紙面をお借りして，赤瀬教授のお人柄に触れておきたい。かつて『古代地中海世界三千年の旅』に寄せられた一文のなかで教授は，ソルボンヌで学ばれた若き日，アテネへ旅したときのことを追懐され，市内のとあるタベルナでイギリス人老紳士に日本の短歌なにがしかの翻訳と解説を所望され，適当なものを思いつかれぬまま自棄になって，

ああ五月フランスの野は火の色すきみもコクリコわれもコクリコ

と与謝野晶子の絶唱を口ずさまれた，というようなことを言っておられる。

「この美しい詩の底にあるものは何なのですか」と，その老紳士に尋ねられたとき，教授（といっても，そのときは未だうら若いソルボンヌの一女子学生）は，「パッション。刹那性，本当の意味での」と答えられた，という。

教授のお仕事の端々にも，どこか激しく初々しい，そのような「刹那的なパッション」とでもいうべきものが覗われるように思われる。どうかそのようなパッション，上品でしかもコスモポリタン的なパッションをいつまでも大事にされ，日仏のみならず広く国際文化の架け橋となるようなお仕事を精力的に続けられ，今後とも，私たちを裨益して下さいますように。

Au revoir

2003年12月20日